

学的融合による都市史研究プラットフォームの構築

正会員 伊藤 毅 君
吉田 伸之 殿

グローバルなネットワーク社会化に伴う都市の変容、また地球環境問題を背景とした持続可能な都市づくりといった新しい課題の登場は、都市の生態、進化過程を従来の歴史学を超えた新鮮な眼差しで、よりの確に理解し直すことを求めている。歴史都市の継承と現代生活との調和に比較的よく成功してきているヨーロッパにおいては、都市史の多様な情報がよく整理され、継承すべきものについてのコンセンサスが形成され、それが現代の保全的な都市計画にも生かされてきているが、それに比較してみれば日本はやや遅れをとってきた。そのような意味で、ここ四半世紀ほどの間に日本において都市史研究が急速に発達してきて、多くの研究者を輩出し、また若手研究者の層を形成し、新しい学問領域を確立してきていることは大きな前進と言えるだろう。

都市・建築史、日本近世史の研究者である本業績の両対象者は、とりわけ永年にわたる多様な取組みを通して学問領域の開拓、研究プラットフォームの形成の中核となって尽力し、成果を上げてきた。このような学問領域の発展過程に、各種の研究論文集、啓蒙書、都市史図面資料集といった出版物、またそれに関連する各種の研究組織の形成、研究集会の開催等が伴った。そこには動的に再編を繰り返す、学問の進化過程のようなものが見られ、都市史をテーマにして建築学と歴史学が融合した学際的な領域を形づくってきた。その過程に多くの研究者が関与してきているが、とりわけ両者が果たしてきた推進者、戦略作成者としての役割は称賛に値するものである。そして、そこに形成された一種の動的なプラットフォームは多くの若手研究者の誕生を促し、また多様な研究テーマを発掘させてきており、さらなる学問領域の拡大、展開を予感させるものである。

今回、両者の編集のもとに出版された『伝統都市』の四巻の書籍は、「アイデア」、「権力とヘゲモニー」、「インフラ」、「分節構造」の四つの概念のもとに、建築史、都市史、西洋史、日本史、美術史の幅広い分野の多数の著者による論文集であるが、まさにそのような学際的な研究プラットフォームの模索と構築の過程が結晶した出版物となっている。そこに提示される「伝統都市」とは、ややもすると保守的になりがちな歴史学的な観点からではなく、歴史を蓄積してきた都市を現代的、普遍的な観点から再解釈し、都市の論理を再発見しようとするものであり、都市の哲学を再構築しようとする試みであると言える。

以上のように、本業績は建築学を核に、新しい研究領域を開拓しつつ、都市史研究の学際的な研究プラットフォームを構築し、将来への展開を促すものとしており、建築学の学術的な発達に大きく寄与したことは高く評価できる。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。